

方向

第一〇六号 一九八九年一月一日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

嵯峨 大念仏狂言 三〇 1989. 10. 25. 原 田 慶

赤と金の明るい色の衣裳に緑の笹を担ぎ、おかつばのような頭に白い布をはちまきのようにして横で結んで、笑みを含んだ小面をつけた百万（ひやくまん）は、思いがけないほどに美しく、童女のようにあどけなく見えた。見失った自分の子どもを求めて、それだけに心を奪われている人の姿は、日常から余分なものを剥ぎ取って、あれほどに明快なものかと思つた。

嵯峨大念仏狂言も、壬生とおなじように無言劇である。冊子によると、嵯峨大念仏狂言は、後継者がないために昭和三十八年から途絶えていた。五十年に保存会ができて十三年ぶりに復活し、五十三年に「百万」も新しく加えられたということである。しかしそれ以後もまた演じられることがなかったようで、今年、十月二十二日に十年ぶりに「百万」が登場するということで、わたしは楽しみに待っていた。

謡曲「百万」のはじめに、

竹馬にいざや法の道、真の友を尋ねん、これは和州三吉野の者にて候。又これにわたり候幼き人は、南都西大寺のあたりにて拾い申して候。この頃は嵯峨の大念仏にて候程に、この幼き人を連れ申し、念仏に参らばやと存じ候。

とあるように狂言でも、始まるとすぐ子どもを連れだした僧が出てくる。舞台では釈迦如来をおまつりして人々が念仏踊りをしており、門僧がうろうろしている。無言だが、旅の二人連れは、何か話しているようにゆっくり進んでくる。「もうすぐだよ、ほらあそこだ、念仏の音が聞こえるだろう」というようなことを話しているのである。立ち止まって話すかとおもうと、手を引いて歩いたりしながら、お堂の方へ近づく。二人とも黒い衣を着て、子どもは紫の風呂敷を肩からななめに背負い、細おもての気の弱そうな感じの面をつけていた。

釈迦如来を拜んでから、旅の僧は、寺の門僧に、子どもに何かおもしろいものを見せてやりたいのだがとたずねると、門僧はちよつと考へて、ああそうだと思いつく。おもしろい狂女がいるから見せてやろう、そこで待つていなさい、という振りをして、念仏衆の中へ入り、調子の合わないむちゃくちゃな踊りを始める。それをどこで見ているのか、百万が出てきて、門僧の肩を、自分の持っていた紅白の短冊のひらひらする笹で打ってやめさせる。これが狂女である。そんなむちゃな踊りをしてはだめだと言っているらしい。僧は百万をうまく呼び出したので喜んでもとの席にもどる。そこで百万がじょうずに音頭を取って人々といっしょに念仏踊りを始める。そのうちにだんだん百万の気持が昂じてきて狂いだし、人々と合わなくなる。釈迦如来の前に来て、子を失った哀しみをうったえ拜んだり泣いたりする。それをじつと見ていた子どもが、自分の母のように思うので尋ねてほしいと頼み、連れてきた僧が、狂女の傍に行つて話す。すると百万は巻物のようなものを取り出して見せる。それが子どもの持っている物と対になっているらしく、僧がたいへんに驚いて子どもに見せる。子どもは紫の風呂敷を解き、なにか証拠のものらしい品を取り出す。二つを合わせて、僧が百万に見せる。喜んだ百万は、正気にも

どり、母子対面になる。子どもや僧はいっしょに、釈迦如来のお引合せと礼拝し、百万は中にはいって、紫地の打ち掛けをきちんと着て出てくる。それから釈迦如来を讃えて、みなで念仏を踊り、その後、よろこんで子どもの手を引いて、僧もいっしょに帰って行く。

言葉がないので、しぐさがかなり説明的で、百万は髪を乱しかにも狂女らしく、証拠の品を持っているところなどは、新しく作られた曲だけに、現代的だとさえ思う。どの人も面をつけているので、悲しさもうれしさも身体の表情で現わすわけで、泣いている時でも面は笑っているのに、見ているとそれが悲しみ以上の悲しみに見えるてしまうのは、演ずる人のうまさはもちろん、観客の思い入れである。これが能で演じられる時も同じことだが、能では狂女だからといって髪を乱したりしない。百万はきちんと美しく整えていて、証拠の品を出すというようなこともしない。

母子再会をあつかう能の曲目に、「三井寺」「桜川」「隅田川」などがあるが、いずれもその地名がつけられている。「百万」は、母親の名になっていて、何とも変わった名まえのように感じる。そのことにつき、この謡曲の内容が、大念仏狂言の創始者とされる円覚十万人の生涯に由来し、あの僧に連れられた子どもが後の十万人上人であり、上人の親だから狂女の名が百万だという説を聞いていた。円覚上人の墓とされる宝篋印塔が清涼寺の墓地の中央にあるので、嵯峨の大念仏で円覚十万人母子が再会したのだろうということを、たやすく信じてしまうのである。それが錯覚だということは、かんがえてみれば気がつくはずであるが「『百万』をめぐって」(原田禹雄)という論文は、これらのことにくわしい。さきの思い違いを改めさせる部分だけを借用してみると、

『百万』の舞台となる清涼寺で、嵯峨大念仏をはじめたのは、…円覚上人修広房導御(二三三、三三二)である。…導御は、唐招提寺中興二世長老の證玄に具足戒を受けて出家した律宗の僧である。彼は勸進聖として、法隆寺・法起寺・壬生寺・花園方金剛院・嵯峨清涼寺などの復興や修造を實踐した。他方、彼は融通念仏聖として、壬生寺や法金剛院、それに清涼寺で融通大念仏会をもよおして、名帳の結縁者が十万人になるたびに、石幢を建てて供養したために、円覚十万人上人とも、十万人上人ともよばれた。…貞応二年(二三三)に、導御は大和の服部郷で生れた。父の大鳥広元は、子がないために、春日明神に百カ日の願をかけた。導御三歳の時、父が死去し、母は導御を育てることができず、東大寺の近くに捨てた。東大寺梅本坊で養育された導御は、十五歳で沙弥戒をうけ、十八歳のとき唐招提寺で具足戒をうけた。

これが円覚上人の出生にまつわるだいたいのことである。ではどうしてその上人が京都に来て、大念仏を行なうことになったのかという点、

文永八年(二七二)『法金剛院古今伝記』に記す次のことがおこった。

《夢殿二詣テテ、一心ニ聖徳太子ニ帰投シタテマツリ、利物度生ノ善巧ヲ祈リ、兼テ又、父ノ善提ト離母トノ再会ヲ云エリ。太子ハ小童ニ託シテノタマワク、汝、所願ヲ遂ゲント欲セバ、名利ヲ捨ツ可シ、道俗ノ男女ヲ集メテ、無遮ノ大会ヲ行ナイ、融通念仏ヲ勸メヨト云々。此ノ托宣ヲ蒙リテ、歡喜踊躍シテ、法隆寺を出デテ、平安城ニ来タリ、法金剛院ニ於テ、専ラ融通念仏ヲ弘ム》

とあり、導御は聖徳太子の夢告により、芸能化してしまっている大念仏を、本来の融通念仏に純化させようと

して、持齋融通大念仏を復興し、父の菩提と生別れの母との再会を祈念したということなのである。そして大念仏会奉修によって、導御に結縁し、名をつらねた人が七十万人にのぼり、俗に導御を百万上人とも称えたということである。

そこで能の「百万」の母親である狂女がどうして「百万」という名であったかであるが、そのことについても同じ論文で考察されている。まず柳田国男の説を引いたのち、

これらの例から、ひとつは大念仏のリーダーとして、清涼寺には、百万という女性がいたという推定がうかぶ。いまひとつは、柳田は、百万が導御の名とすれば、母の名ではなくなるとしているが、それはさておき、人々の心の中には、導御の母は百万だというおかしがたい錯覚がつきまよっていることはたしかである。百万母子は清涼寺で再会した。しかし、導御は、母と播磨の国で再会したと『法金剛院古今伝記』がいつている。そして、導御が母と再会しえたのは愛宕山の地藏菩薩の利益だったのである。導御は母との再会をはたしたのち、清涼寺に地藏院を建立し、地藏菩薩と聖徳太子の像を安置している。

つまりわたしなどが、円覚上人の話だと思っている「百万」は、事実とはずいぶん違っているわけだが、嵯峨大念仏を始めたのが円覚上人なのだから、能や狂言の「百万」が、その通り円覚上人の母子再会の事実であるはずもないわけである。さらに百万の名については、

沖繩の童名に、百がある。ヘビヤークと発音する。この百という童名は、平民にはほとんどつけられることはない。いわば、久米村の専有の童名である。久米村は、中国の福建地方からわたってきた人たちによつ

て形成された町である。百万塔、百万陀羅尼、百万遍念仏等々、昔からわが国には、百万という言葉が沢山あったのだから、百万の名を、ことさら速くに求めることはない、私は思っている。能の『百万』のシテの名が百万であることは、結局は、シテが舞うクセ舞を伝えた女性が百万であったからにちがいない。

と述べられている。十万の親だからというので百万ではなく、古くはこの能も「嵯峨の大念仏の女物狂の能」と呼んでいたことである。わたしたちがこの話を円覚上人のことと思ひ込んでゐるのは、上人が、寺々の修復のほかにも、獄舎の囚人や悲田院の病人、貧者や非人の救済にあたり、これらの人々に救世者として仰がれていたために、その生涯の事績を導御の母子再会譚をもとにした世阿弥作の謡曲「百万」によってそれらの人々に語り継がれてきたということにあるらしい。

それにしても親と子がいっしょに暮らすという、今のわたしたちが当然のように思っていることが、貧しく不自由だった昔には、大変に難しいことだった事情が考えられる。「三井寺」「桜川」は母がさがしに来て再会するが、「隅田川」は子どもはすでに亡くなっていて、母の幻としてしか登場しない。「百万」は子どもが旅してきて再会する。そこに円覚十万人という人があるのではないかと感じる。

わたしはこの嵯峨大念仏の狂言の保存会ができた五十年の春に、偶然、嵯峨野に来て、桜の散る狂言堂の前の広場で「とろろ」というのを見た。念仏狂言という無言劇を見るのが初めてだったので何とも不思議なものを見る思いがした。とろろいもを食べさせる茶屋に盗人が入るが、下働きの男がとろろをつかかって盗人をつかまえ、みんなが滑ってしりもちをついて大騒ぎをしているという、あまり意味がわからないものだった。

嵯峨も壬生もほとんど同じ曲目を演じているが、比べてみると嵯峨の方がより素朴で、壬生のずっしりした重たさに対しては、きゃしゃでひょうひょうとしているように思う。それは舞台の違いによるのかもしれない。壬生は最近の入場料をはらって舞台の向かい側の建物から見るので、見物の目が舞台と同じ高さか、それよりむしろ上にあつて、演じている人の足が、能と同じ摺り足であることまで見える。座ってもその全体の姿がよくわかる。嵯峨の方は、二階の舞台で演じられるのをしたの地面から見上げるので、舞台の腰板にかくれて膝から下はほとんど見えない。歩く人がどのようにあしを運ぶのか、座った人がどのようにひさを組むのかが見えない。そのため演じる人が見物に分からせようとしてか、動きがどうしても大きくなる。より説明的で、人形振りのようにいくらかほきぼきして、騒がしく、滑稽味が増してしまうこともある。見物も自由だから、通り掛かりの人が立ち止まって見るかと思えば、あまり興味がわかぬと行ってしまふといったふうで、流動的なのである。嵯峨の方が昔の姿に近いはずなのに、見に来る人は壬生の方が多きようである。なんでもお金を取らないと見にくいという不思議な現象がここにも起こっている。一時から始まるはずの狂言は、時間が来ても、見物はあまり集まらなかった。

わたしは、円覚上人の供養塔にお参りしようと思つていたので、早く家を出て、清涼寺の墓地でゆっくりした。墓地には人影がなく、秋の日が明るくて、上人の墓には菊が供えられていた。一時少し前に狂言堂に行ったが、ビデオを撮ろうとしている人や、演者の家族が集まって挨拶をしたり、笛の練習をしている人などが、まだ狂言堂に出たり入ったりしていた。始まるのが三十分ほど遅れます、ということなので、清涼寺の宝物展を見にゆき、

一時三十分に帰ってみると、すこし人が増えていた。そこへ初老の男の人が来ると、演者が迎えて挨拶をしている。どういふ人なのか、遠くから来たらしくて、二十日に家を出て、二十一日は滋賀県で太鼓台まつりを見物、今日はこちらです、といっていた。

この日の演目は、嵯峨狂言が「釈迦如来」「百万」「紅葉狩」の三曲、えんま堂狂言が招待されて「土蜘蛛」「道成寺」の二曲だった。えんま堂狂言は、嵯峨や壬生のとは異なり、セリフが入り、能の名告りと同じような節がついている。まもなく狂言が始まった。

清涼寺の境内はひろく、狂言が進むうちに、本堂内では午後の動行の鐘の音が響いてきた。空は青く晴れて、時々、門の脇にある茶店から、あぶり餅かなにかを売る呼び声が聞こえてくる。学校の長椅子と同じ木の堅い席だけとゆったりとして、まだ土の香を失っていないような芸能を楽しんでいると、すっかり現実を忘れてしまふ。なんとこの贅沢だろう。振りかえれば釈迦堂の大きな屋根。笛や太鼓のカンテンデンというのもいくらか途切れたりして気楽に打っているようだし、見上げている小さい子どもが、舞台の僧を指して「お父ちゃん、お父ちゃん」などと言っている。

わたしもやはり最後まで見ていられなかった。「百万」が終ると三時二十分だったが、家の近くまでゆくバスが一時間に一回だけあるので、それに乗るために寺の門を出た。バス道路まで来ると自動車の行列で、ほとんど動かないほど停滞している。ずっと以前は畑や田のなかの細い道だったのに、すっかり変わってしまった。バスが嵯峨小学校の角までの三百メートル余りを出るのに何分かかっただろうか。どの自動車の中の人もただ黙っ

てひたすら前方を見つめている。学校にも近くの家にも人は見えなくて、リュックを背負った家族連れが道を歩いているのが、わずかに日曜らしい。こんな風景の中でも釈迦堂ではまだ狂言が続けられている。保存会代表の松井さんという人が、無形文化財としての助成金は少しあるが、衣裳などの補充や狂言堂の維持費はどこからも出すところがなくて、資金面で困っていると話しておられた。やはり壬生のように入場料をとるよりほかに仕方がなくなるのかもしれない。

観戦

後飯

—真山民の詩 二—

1989.10.28.

原田憲雄

春の遊び

春の光はまぶしいくらい明るくて

見晴らしすばらしい新しいあずまや

海棠が酔えば風がたすけおこし

柳が眠れば鶯がよびさます

杯にそそぐ緑の酒がないではない

髪をいつまで青々させておけようか

まあおたがい日々たのしんで

春遊次胡叔芳韻

春光澗眼明

占勝得新亭

棠醉風扶起

柳眠鶯喚醒

非無杯泛緑

安得鬢留青

且自日為樂

歌声の絶えないようにしようじゃないか

かりずまい

隠者のようなわびずまい

草むらにきえる小道ひとすじ

土地はせまいが見晴らしよく

門はひくいが気ぐらいはたかい

政治談義はおことわりだが

長いものにも巻かれはせぬ

身すぎ上手かへたかは聞くな

のんきに暮らせば苦勞にまさる

戦後

目に触れるすべてがむかしを思わせて

高みにのぼればこころがいたむ

ちる花は さすらいの子

ふるい木は 老いさびた人

世はかわっても山はさきの日のまま

歌声莫暫停

長橋寓舎陋甚

幽栖如仲蔚

一徑没蓬蒿

地窄眼偏濶

門低氣儘高

尚能非國語

何用反離騷

窮達都休問

居安亦勝勞

兵後寓舎春望

触景多懷旧

凭高易愴神

飛花遊蘂子

古木老成人

世換山如昨

田はあれても草はもう春だ
ふるさとはいったいどのあたりかと
みまわしても暗い風にたつ塵

道教寺院

まちを出て 東へ また東へ
やがて歩み入る古い道教寺院
蟬は幽玄をかたるようだし
花は色空をたのしむらしい
池は秋草のみどりを分け
高樓たかどのは夕映えのくれないにせまる
はやくも廊下に涼しさいっぱい
両袖の風に蓮のはなの香か

宝勝院

苦吟すれど 詩はまとまらず
わたり廊下 ゆききするのみ
月さって 塔に影なく

田荒草自春
郷関渺何処
回首暗風塵

報恩観

出城東復東
步入古琳宮
蟬似談玄妙
花応恨色空
池分秋草碧
楼接暮霞紅
涼満修廊早
荷花両袖風

宿宝勝院

苦吟吟未了
只向両廊行
月去塔無影

（恨ハ娘ノアヤマリカ）

風きたり 鈴に声あり

禪心は 水と 浄きよらに

仏眼ぶつげんと ともしび 明あかし

雲のへに とどまるをえば

このすがしき 僧とわかたむ

川 口 で

夜に入ってやつと舟をつないだのは

芦の葉黄ばむふるい渡し場

ねていた鴈かりが どうぞ とばかり

蓼れいの花さく中洲なかつしゅうにうつる

白 い 雲

白い雲がいつぱい ひっそりした山に

山はひっそり 人はまだかえられぬ

杖で門をたたいたりはしないでおこ

びっくりして白い雲が飛びたつといけないから

風来鈴有声

禪心随水浄

仏眼共燈明

安得雲辺住

与僧分此清

泊水口

入夜始維舟

黄蘗古渡頭

眠鴈知讓客

移過蓼花洲

訪李廷玉不遇

白雲滿空山

山空人未帰

拄杖莫敲門

恐驚白雲飛

風が吹いて

1989. 10. 29. 原田 慶

桐の葉がすっかり落ちて裸になった枝が
空に向かって大きな弧を描いている

太陽の小坊主のように金色の外套をきっちりつけて
雪の中で花を咲かせようと

枇杷のつぼみたちは待ちかまえているが
きのうのこと

「きょうは暑いくらいですね、二十五度もあります
よ。季節がおかしいのではないかと昨年の記録を調
べてみましたら、やっぱり十月二十八日はおんなじ
くらいあって、二十九日には十八度までさがってい
るのです。きょうはこんなに曇ってきたし、きっと
あすは寒くなるでしょう」

とミルクを持ってきてくれた人が話していった
夜になり強い季節風が吹いて 一晩中

ガラス戸をゆすっていたので

朝 起きてみたら 落葉がいっぱい

それでもまだ風が吹いている

掃いてもすぐ落ちてくるのに

いつまでも掃いている人といっしょに

ころがっているクルミを拾っていたら

「寒山拾得だな、あんたは拾得」といったけど

わたしはただクルミを拾うひと

ツイ ツイ ツイ ツイ

ジュク ジュク ジュク ジュク

鋭く鳴いて枝をめぐりながら虫をさがしているのは

若いシジュウカラの群

白いシャツに

黒いネクタイをしめてそれでも

とくべつ陰気くさくはない

こんな風が強いのだから

みんなはぐれないようにお行き

ツイとまっすぐ飛んで振り返りもしないヒヨドリは

粹だけど

ジユクジユク言っているあんたたちはかわいい

寒山どのは風にもまれて

どこへまぎれこんだのかと思つたら

メ ジロ が 来 た

1989.10.31.

原 田 慶

メジロが四羽とんできて

桐のつぼみに頬ずりしながら

ひらひらと蝶のよう

空中で羽ばたきしながら口づけている

まだ葉をのこしたままの梧桐の間では

物置から埃まみれの本を山ほど

かかえてお帰り

風がつよく吹いて雲は南へ行くようだ

気温は二十度

このふんだと

夜にはぐんと下がりそう あすも

あさっても

寒くならないといいけれど

あまりに早くあちこちから頭を出すので

十もいるのかと思つたけれど

飛び出して行つたらやっぱり四羽だった

山に近い寺では

ウグイスが来たという便り

今年は山に木の実が少なかったのだろうか

足音のようにかすかだ

小さな花アブが池の端の菊を揺らして

金魚たちがようやく

ネズミモチの枝先は時々

わたしの呼ぶのをおぼえたと思ったのに

火山灰よりもこまかい毛虫の糞を

水が澄んできてもう

カサカサと降りしてくる

少し眠りはじめて

それは通りすぎて行く秋の

岩城久治句集 『枕』

百反』

1989.11.11. 原田憲雄

『負債感』『春暉』に続く第三句集である。著者は一九四〇年生れ。十代から句作をはじめ、「風落ちし後も落葉の降る音す」「雪つひに学ばざる日の負債感」「どくだみやなべて家捨つ一部落」「四月馬鹿眼鏡は鼻梁ずり易し」「綿虫や思ひ出せざる一事あり」「子はおのが涙を言はず椎拾ふ」「海見えて廓裏町風花す」「雪明り腰の高さに漣屋窓」「牡蠣割りてをり無期停学の子を訪へば」など、雪多い丹後で教員生活を続けながら、鋭さを穏やかな言葉にひめた作品を重ね、その俊英はいつか人々の目をひくようになっていた。このたびの集は『春暉』以後一九八六年まで、京都府立山城高校に転動してからの作品を収め、「連艦に風触れゆくをまぶしめり」のようなあかるい句、「蛸輪の優柔不断こそいとし」のような注目すべき句を生み、「母逝きて暗きに梅酒遣りけり」「出嫌いの父の解かざる懐手」「ところてん好みし妻に付き合はず」など家族をうたった好句も少くない。

314. こう言うと、世尊は長老シャーリプトラに次のように語った――

あなたに告げよう、シャーリプトラよ、天と共なる世界の前で、悪魔や沙門やバラモンの会衆をふくむ人びとの前で。わたしによってあなたは、二万億の仏の近くで、無上の正しい覺りへと成熟させられてきた。そしてあなたは、シャーリプトラよ、長夜を通じてわたしに学んできた。あなたは、シャーリプトラよ、ボサツとしての祝福、ボサツとしての秘要によって、わたしの教示に生きるようになった。あなたは、シャーリプトラよ、ボサツとしての立脚点により、過去の修行や誓願、ボサツとしての祝福、ボサツとしての秘要を忘れ、自分は涅槃に入ったと思っている。わたしはあなたに、シャーリプトラよ、過去の修行や誓願や、知識にめざめたことを、思い出させようとして、この妙法蓮華という法門、ボサツを教誡し、一切の仏が護持する、広大な經典を、声聞のために説き明かすのだ。

さてまた、シャーリプトラよ、あなたは未来の時に、計りえない、不思議な、想像も及ばぬカルバの間、幾千万億という多数の如来の妙法を保ち、さまざまの供養をし、このボサツの修行を完成し、「華光（けこう）」という名の如来・尊敬されるべき・正しく覺った・学行成就者・スガタ・世界を理解し・無上で、修練すべき者の調教師・天と人との教誡者・仏・世尊として、この世に生れるだろう。

さらにまた、シャーリプトラよ、その時、あの世尊・華光如来の「離垢（りく）」という名の仏国土が生

じるだろう。そこは平らで、楽しく、きちんとしていて、最も見晴らしがよく、清潔で、ゆったりしていて、栄え、おだやかで、食料ゆたかに、多くの男女の群れで満ち、諸天がいっぱいで、瑠璃で造られ、黄金の糸で八つの地区がくぎられている。その各地区には宝樹があって、七宝の花や実を絶えずつけているだろう。

そしてシャーリプトラよ、華光如来、尊敬されるべき、正しく覺った人もまた、三つの乗から法を説きはじめるだろう。またシャーリプトラよ、その如来は、劫濁の世には生れないのだが、しかしその誓願の力によって法を説くだろう。

「大宝莊嚴」と、シャーリプトラよ、そのカルバは名付けられよう。どう思つかシャーリプトラよ、いかなるわけでそのカルバが大宝莊嚴というにふさわしいかを。「宝」とは、シャリプトラよ、仏国土ではボサツのことなのだ。その時、その世界には、多数のボサツがいるだろう。はかりえず、無数、不思議で、比較計算もおよぶまい、如来の計算をのぞいては。このようなわけで、そのカルバは大宝莊嚴というにふさわしい。

またシャーリプトラよ、そのとき、その仏国土にいるボサツたちはおおむね宝の蓮華を踏んで歩く者となるだろう。それらのボサツは、初心者ではなく、長いあいだ善根を修行し、幾百千の多数の仏のもとで梵行をおさめ、如来に称讃され、仏の知識に精励し、大神通を陶冶することによって生れ、すべての法門に熟練し、しなやかであり、前世を記憶しているだろう。おおむね、シャーリプトラよ、このようなボサツ

たちによって、この仏国土は満たされているだろう。

またシャーリプトラよ、華光如来の生命の長さは十二アンタラ・カルバであろう、王子であった時をのぞいて、その衆生の生命の長さは八アンタラ・カルバであろう。そしてシャーリプトラよ、華光如来は、十二アンタラ・カルバが過ぎ去ることによって、「堅満（けんまん）」という名のボサツ大士の無上の正しい覺りを、次のように授記して涅槃に入るだろう——ピクたちよ、この堅満ボサツ大士は、わたしに続いて無上の正しい覺りを得て、「華足安行（けそくあんぎょう）」という如来で、尊敬されるべき・正しく覺った・学行成就者・スガタ・世界を理解し・無上で・修練すべき者の調教師・天と人との教誡者・仏・世尊となるだろう、と。そうしてシャーリプトラよ、華足安行如来の仏国土もまた、さきに言ったのと同様であろう。

さてまたシャーリプトラよ、華光如来が涅槃すると、三十二アンタラ・カルバの間、その妙法は存続し、それからその妙法が消滅すると、三十二アンタラ・カルバの間、妙法に似た法が続くだろう。

evam ukte bhagavān āyusmantam śāriputram etad avocat/ ārocayāmi te śāriputra prativedayāmi te
'sya sadevakasya lokasya purataḥ samārakasya sabrahmakasya saśramaṇa-brāhmaṇikāyāḥ prajāyāḥ
purataḥ / mayā tvam śāriputra viṃśatīnām buddha-koṭī-nayuta-śata-sahasraṅgām antike pariṭcīto
'nuttarāyāṃ samyak-sambodhau / mama ca tvam śāriputra dīrgha-rātraṃ anusīksīto 'bhūt / sa tvam
śāriputra bodhisattva-samantrītena bodhisattva-rahasyeneha mama pravacana upaṇaṇaḥ / sa tvam

śāriputra bodhisattvādhiṣṭhāneṇa tat paurvakam caryā-praṇidhānam bodhisattva-saṃmantritaṃ bo-
 dhisattva-rahasyam na samanusmarasi / nirvrto 'smīti manyase/ so 'ham tvam śāriputra pūrva-ca-
 ryā-praṇidhāna-jñānubodham anuśmārayitu-kāma imaṃ saddharmapuṇḍarīkaṃ dharmā-paryāyam sūtā-
 ntaṃ mahā-vaipulyam bodhisattvāvavādam sarva-buddha-parigrahaṃ śrāvakāṅgām saṃprakāśayāmi //
 api khalu punaḥ śāriputra bhaviṣyasi tvam anāgate 'dhvaniy aprameyair kalpair acintayair apra-
 māṅgair bahūnām tathāgata-koṭī-nayuta-śata-sahasraṅgām saddharmaṃ dhārayitvā vividhām ca pūjām
 kṛtvemām eva bodhisattva-caryām paripūrya padmaprabho nāma tathāgato 'rhan samyak-saṃbuddho
 loka bhaviṣyasi vidyā-carana-saṃpannaḥ sugato loka-vid anuttaraḥ puruṣa-dāmya-sārathih śāstā
 devānām ca manuṣyāṅām ca buddho bhavagān //

tena khalu punaḥ śāriputra samayena tasya bhagavataḥ padmaprabhasya tathāgatasya virajam nāma
 buddha-kṣetraṃ bhaviṣyati samam ramaṇīyam prāsādikam parama-sudarśanīyam pariśuddham ca spṛīt-
 am ca rddham ca kṣemam ca subhikṣam ca bahu-jana-nārī-gaṅgākīrṇam ca maru-prakīrṇam ca vaidūr-
 ya-mayam suvarṇa-sūtrāṣṭā-pada-nibaddham / teṣu cāṣṭā-padeṣu ratna-vṛkṣā bhaviṣyanti saptānām
 ratnānām puṣpa-phalair satata-samitāṃ samarpitāḥ //

so 'pi śāriputra padmaprabhas tathāgato 'rhan samyak-saṃbuddhas trīpy eva yānāny ārabhya dhar-
 maṃ deśayisyati / kiṃ cāpi śāriputra sa tathāgato na kalpa-kaśāya utpatsyate/ api tu praṇidhā-

na-vaśena dharmaṃ deśavisyati ||
 mahāratnapratimaṅgitaś ca nāma śāriputra sa kalpo bhavisyati / tat kiṃ manyase śāriputra kena
 kāraṇena sa kalpo mahāratnapratimaṅgita ity ucyate / ratnāni śāriputra buddha-kṣetre bodhisat-
 tvā ucyante (W:ucyate) / te tasmin kāle tasyāṃ virajāyāṃ loka-dhātau bahavo bodhisattvā bhaviṣ-
 yanty aprameyāsakṣhyeacintyātulyānāpyā gaṇanāṃ samatikrāntā anyatra tathāgata-gaṇanayā / tena
 kāraṇena sa kalpo mahāratnapratimaṅgita ity ucyate ||
 tena khalu punaḥ śāriputra samayena bodhisattvās tasmin buddha-kṣetre yad-bhūyasā ratna-padma-
 vikrāmiṇo bhavisyanti / anādi-karmikāś ca te bodhisattvā bhavisyanti cira-carita-kuśala-mūlā
 bahu-buddha-śata-sahasra-cīrṇa-brahma-caryās tathāgata-parisaṃstutā buddha-jñānābhikyuktā mahā-
 bhijñā-parikarma-nirjātāḥ sarva-dharma-naya-kuśalā mārdayāḥ smṛtīmantaḥ / bhūyistena śāriputr-
 aivam rūpāṇāṃ bodhisattvānāṃ paripūrṇaṃ tad buddha-kṣetraṃ bhavisyati ||
 tasya khalu punaḥ śāriputra padmaprabhasya tathāgatasya dvādaśāntara-kalpā āyuṣ-pramāṇaṃ bha-
 visyati sthāpayitvā kumāra bhūtatvam / tesāṃ ca satvānāṃ aśfāntara-kalpā āyuṣ-pramāṇaṃ bhavi-
 syati / sa ca śāriputra padmaprabhas tathāgato dvādaśānāṃ antara-kalpānāṃ atyayena dhṛtiparip-
 ūrṇaṃ nāma bodhisattvaṃ mahāsattvaṃ vyākṛtyānuttarāyāṃ saṃyak-saṃbodhu parinirvāsyaati / ayaṃ
 bhiksavo dhṛtiparipūrṇo bodhisattvo mahāsattvo mamāntarāṃ (M:mamottarāṃ)anuttarāṃ saṃyak-saṃ-

bodhim abhisambhottsyate / padmavrsabhavikrāmi nāma tathāgato 'rhan samyak-sambuddho loka bhav-
isyati vidyā-carana-sampannah (W:sampannah) sugato loka-vid anuttarah pursa-damya-sāratih śāsta
devānā ca manusyānā ca buddho bhagavān/ tasyāpi śāriputra padmavrsabha-vikrāminas tathāgata-
syaivam-rūpam eva buddha-ksetram bhavisyati ||

tasya khalu punah śāriputra padmaprabhasya tathāgatasya parinirvrtasya dvātriṃśad-antara-kalp-
ān saddharmah sthāsyaati / tatas tasya tasmin saddharma-ksige dvātriṃśad-antara-kalpān saddhar-
ma-pratirūpakah sthāsyaati ||

ここは、釈尊のシャーリプトラに対する「授記」すなわち、仏になるだろうという予告、である。「法華經」
における釈尊の授記が、声聞の長老シャーリプトラから始まることは、意味ふかい。が、これについては後に述べ
るだろう。

「天（神）と共なる世界の前で」というのは、人間の世界で人間だけの問題としてではなく、という意である。
「悪魔や沙門やバラモンの会衆の前で」とは、人間の世界の内でも、釈尊の弟子たちだけといった閉ざされた団
体のなかではなく、世間で「悪魔」とよばれる種類の人々、沙門とよばれる自由思想家、バラモンとよばれる宗
教家…にも開かれた場面で、ということである。そこで授記することは、もしこの授記に異議があるならば、い
かなる立場からの異議も提出されてよく、その異議に対しては、常に明らかな証明をもって対しうる、という保
証が前提されているのだ。

釈尊の教えでは、すべてのものは、相依って幻のように現象しているにすぎない。したがって、「天（神）」も「悪魔」も「人間」……も、ものを差別することによって成り立つ識知、すなわち分別知が生み出す幻想にすぎない。そのような幻想を「存在」として認めない。だから仏教は、思想の分類からすれば「無神論」とされる。そのとおりだけれども、また「神」の存在を信じる立場の人々がいることを無視しない。そういう人々に、仏教徒だけの考えを押しつけ押し通そうはしない。いかなる立場の人によっても、人間でないさまさまのものの立場からも、納得されるありかたを見出そう、という考えが釈尊の思想の根底に流れている。その考えからするならば、釈尊の教えはなにもに対しても開かれており、なにもにたいしても隠されていない。釈尊の言葉が多義的であるために「わかりにくく」「知りがたい」といわれ、それゆえに「秘密」「秘要」などの言葉が、すでにこの『法華経』にもたびたび現れたが、これは釈尊の側の閉鎖からおこる秘密ではなく、怠惰や幼稚さといった受け取る側の心の閉鎖を原因とする秘密なのだ。いま、釈尊のシャーリプトラに対する授記は、このような公開の場面で行なわれようとするのである。

「わたしによってあなたは、二万億の仏の近くで、無上の正しい覺りを成熟させられてきた」という言葉はわかりにくい、次のような意であろう。すなわち、シャーリプトラは、今生で釈尊の教えを受けはじめた以来のことしか頭にない。しかし彼は、前世においてすでに二万億の仏たちに近付き奉仕してきたのであり、それもまた釈尊の教示によったのだ。そうしたことによって、彼はこの世に生れるまでに、すでに無上の正しい覺り、大乘あるいは仏乗とよばれる教えを、受け入れうるまでに成熟していた、というのである。

では、前世のシャーリプトラを教示した釈尊と、いまの釈尊とは、どのような関係にあるのかという問題が起ころうが、それは後の「如来寿命量品」で説かれ、証明される。

「二万億」は妙本に従ったので、正本では「三十二千億」、梵文を直訳すると「二十、千万、百万、十、千」である。大きな数の表現法については前にもいったが、大体のところは妙本に従いたい。

「そしてあなたは、シャーリプトラよ、長夜を通じてわたしに学んできた」とは、今生においても「わたし」すなわち釈尊に、学んだことをいう。「長夜」は単なる長時間を指すインド的表現だが、「夜」の語に独特の、暗さ、静かき、死などの陰影をおびた使い方のされることも多いようである。例えば『楞伽經』のラーヴァナの「長夜」。『法華經』のここでも、シャーリプトラにとっては、悲しみにもなわれた時間だった。

前世・今生の釈尊の導きにより、「ボサツとしての祝福」も「ボサツとしての秘要」も与えられ、釈尊の教示、大乘の教え、仏乗、無上道に生きるようになった。

ところが「あなたは、シャーリプトラよ、ボサツとしての立脚点により、過去の修行や誓願、ボサツとしての祝福、ボサツとしての秘要を忘れ、自分は涅槃に入ったと思っっている」。この「ボサツとしての立脚点により」はわかりにくい。正本、妙本ともに、対応する訳語を確定しにくく、南条・泉訳は「菩薩の力によって」「河口訳は「菩薩の加持によって」「岩本訳は「仏の不可思議な威力により」「松浦訳は「菩薩として（自らに）力を加えたことにより」とする。いずれにしてもそのような力によって、なぜ「忘却」が生ずるのかは、はっきりしない。むしろ「ボサツとしての立脚点にすでに立ったのに」というほどの意であろうか。「過去の誓願」とは、おのれ

の安樂のためではなく、他のものをも仏とならせようとする願いである。「ボサツとしての祝福」とは、そのような誓願を持つ者として過去の如来たちによって激励された、ということ。「ボサツとしての秘要」とは、その誓願を持続して、終わることのない道を歩き続けることをいう。それを忘れて、心の平安に入ることが涅槃であり、自分は涅槃にすでに到達したと、シャーリプトラは思い込んでいた。この思い込みの状態を「声聞」というのだ。シャーリプトラの忘却には、『法華経』のはじめに出てきた弥勒ボサツの忘却が映っているのではないか。そうして、この忘却から呼び醒ますために、釈尊がかれら「声聞」のために、いま『法華経』を説いているのだ。

シャーリプトラは、はるか未来に華光如来となるだろう、というのが授記の第一である。はるか「未来」というのは、そのときまでかれがボサツとしての誓願によって活動しつづけるということだから、大乘の立場としてはこれこそ正当な活動の在り方であり、初転法輪いろいろの釈尊の生涯にそった生き方である。後に「即身成仏」という考え方が出てくると、未来成仏はいやしめられるようだが、それは間違いで、仏の資格はあっても「仏」とならずボサツとして働き続けるのが『法華経』のいうボサツであろう。「華光」は、正本に「蓮華光」とし梵文に近いが、妙本の簡潔に従う。授記の第二は、華光如来の仏国土で、その名は、けがれをはなれた「離垢」。きよらかなシャーリプトラの活動場面として、たいへんふさわしい。「八つの地区」は、正本は「八重交道」妙本は「八交道」岩本訳は「八つの花卉」松清訳は「碁盤模様」と分かれるが、妙本にちかい訳語を選んだ。

※前号正誤 一八頁 一〇行 九州でイチイの木の型をとり ↓ 四国でクヌギの原木の型をとり

同頁 一一行 石造り ↓ 造り